

消化器がん化学療法

研究可能テーマ

研究可能テーマ	研究指導者	受け入れ可能院生数
(1)抗癌剤感受性規定遺伝子の探索 すでにフッ化ピリミジン系薬剤においては核酸合成酵素の腫瘍細胞内mRNA発現レベルや遺伝子多型からの薬剤感受性予言が確立しつつあるが、他の薬剤に関してもより精度の高い感受性予言ができるように研究を行う。	林大学院教授 倉持准講師	2
(2)抗癌剤感受性規定遺伝子の探索 臨床上化学療法と切り離すことはできない副作用について、そのメカニズムと発現予測に関する分子生物学的解析を行う。	林大学院教授 倉持准講師	1
(3)末梢血遊離癌細胞(CTC)からの遺伝子解析 消化器進行癌においては過半数の症例で末梢血に癌細胞が逸脱している。magnetic beads法などのCTCの採取法を確立するとともに、将来的にはCTCからの遺伝子学的解析を行いたい。また末梢血浮遊細胞の検出頻度は血行性転移病変の出現頻度より遙かに高い。この転移選択性のメカニズムに関しても浮遊癌細胞の接着能や血管新生因子などの基礎的な側面から詳細に検討する。	林大学院教授 倉持准講師	1
(4)化学療法施行時の免疫モニタリング 化学療法時には単に骨髓抑制からの白血球減少のみならず、液性免疫に関しても細胞性免疫に関しても免疫能の低下が予想されるが、その客観的評価基準は確立していない。消化器外科教室に既設のがん免疫細胞治療分野スタッフと連携して免疫モニタリングや免疫賦活などの研究を行なう。	林大学院教授 奥山助教	1
(5)癌化学療法領域における代替医療 サプリメントや漢方薬など一般的に免疫力を高めたり化学療法の副作用を軽減すると言われていた代替医療に関しての基礎的あるいは臨床的な検討を行う。	林大学院教授 奥山助教	1
(6)化学療法著効例の遺伝子学的背景因子の探索 消化器癌は化学療法のみで完治することはまれであるが、教室には化学療法が著効し完治に至った症例が数十例ある。これら貴重な症例の遺伝子学的背景を徹底的に探索し、新しい画期的な治療法の開発を目指す。	林大学院教授 倉持准講師	1
(7)オーダーメイド化学療法の方法論の検討 オーダーメイド化学療法を臨床導入するために必要な統計学やデータ解析方法を学ぶとともに、社会学的な側面として倫理的問題や法的問題、経済効果なども研究する。	林大学院教授 倉持准講師	1